

中国旅行を振り返って

伊藤 正教

「禅研究所で訪中団の団員を募集しているが、参加を希望する人はいませんか」この田島先生のお言葉が、今回の中国旅行のきっかけでした。私はそれまで海外旅行は一度も経験していませんでしたが、今回の旅行は仏教寺院に参詣し、朝課にも随喜するといった意義あるものであることを伺い、参加を決意しました。また、現在中国旅行は欧米への旅行に比較して制限が多いことも考え、この際じっくりと中国の生活・風俗をみて、できるだけ多くの中国の人と話してきたいと思いました。

「暑い！」上海の虹橋空港に着いてタラップに出た瞬間の感想でした。また、一瞬でしたが形容しがたいそれまで嗅いだことのないにおいを感じました。後で思い出したのですが、東大の鎌田先生が講義中に話されたことで、先生は外国へ行かれると同じような経験をされ、日本へ帰った時にも日本のおいを一瞬感じられたそう、それは沢庵のおいだそうです。私が上海で感じたにおいは何だったのか思い出せないのが残念です。

中国旅行を振り返って(伊藤)

上海市内に入って気がついたことは、家が煉瓦で作ってあることです。上海市郊外の家の塀ぎわには、たくさんの新しい煉瓦が整然と並べてあったり、古いこわれた煉瓦が無雑作に山のように盛ってあり、これらを見て最初「雑然とした町」という印象を受けました。また、はでやかな色彩がないのもそう感じた理由の一つでしょう。煉瓦で作られた家はその上に壁土が塗られ、一見したところではコンクリートで作られているように見えます。もちろん公共建築物の中にはコンクリート造りもありました。木造の建物は、寺院や園林(留園とか獅子林)にあるものだけでした。もちろんこのことは後にわかったことですが……。中国ではなぜ一般家屋が木造でないのか、木造家屋に慣れ親しんできた日本人としては不思議だったのですが、それもおぼろげながらにわかってきました。上海から杭州まで列車で移動したのですが、その間平野ばかりで高い山並が全く見えず、高い大きな木もなかったようです。また中国旅行から帰って後に調べたのですが、黄河・揚

子江の流域に広がる平野は日本全土がすっぽりと入るほど広く、さらに森林地帯は中国の東北部や南西部にしかなく、結局日本のように簡単には木材が手に入らないことが、木造家屋が少ない原因ではないかと考えるのです。

杭州に着いた翌日、マイクロスバス二台で天台山国清寺に向かいました。まわりは田園地帯でちょうど収穫期だったので、舗装された、車二台が楽に対向して通れる道路の3分の1から半分を使ってモミがほじてあり、農民はといえば、鋤をかついだり、荷車を引いて悠々と歩いていきます。そのような中へ手前百メートルぐらゐから、無暴ともいえるスピードで鋭くクラクションを鳴らしながらバスは突っこんでいく。それに対して農民たちは、うしろを振り向く気配もなくゆっくりとわきへ寄る。もっともこのような場面は上海・杭州といった都市でもよくみられたのですが、実に大陸的でした。

天台山国清寺、ここは文化大革命であまり大きな被害を受けなかったのか古いたたずまいをみせていました。しかし仏像はやはり破壊されたらしく、まだ金色に輝く新しい仏像が各所に安置されています。建築物はどれも雄大で、特に高くそびえ立つ隋代の塔は約千四百年の歳月を感じさせるとっしりとしたものでした。国清寺では寺内の施設で一泊しました。訪中団の全行程に随行した通訳の陳杏奎さんの話によれば、この施設は中国の高級官僚がこの地方で会議を行うときにも利用するというものでした。

部屋は六、七畳の広さで、四本の木の足の竹で編んだ床が設けられた寝台が二台、各々には蚊屋が吊っており、扇風機が一台備えられていました。次の日泊った天童寺も施設は同程度でした。この二日目、三日目の頃に、熱い風呂に入りその後で冷たい水を飲みたいという欲求が一番高かったと覚えていますが、ですから四日目に杭州の杭州飯店に着き、入った風呂は最高でした。

杭州飯店で夕食後、外を少し散策し、次にホテル内にあるダンスホールをのぞいてみました。そこは天井の高い講堂のようなホールでしたが、薄暗いあかりの中で、両脇にテーブル・椅子が並べられ一番奥では楽団が演奏していました。踊っているのは欧米からの旅行者ばかりのようで、そのうち暗さに慣れ私達のまわりの席をみると、結局日本人は誰も居ませんでした。ダンスも社交ダンスではなくディスコ風でもなく、ヨーロッパの民族舞踊のように手をつないだり離したり飛んだり跳ねたり、振り回したりと実にエネルギッシュで終始圧倒されどおしでした。しかし見ているうちに、私は明治の鹿鳴館にいるような気分になってきました。広いホール、聞きなれない音楽、踊る人々。もちろん、明治の鹿鳴館は不平等条約改正を諸外国に承認させる為の一つの企てであり、そこは日本人と外国人との社交場であったのだし、ここは外国人専用の娯楽場であり、風俗・習慣が異なる中国で、長い旅をする外国人にとって最良の娯楽場です。ですから鹿鳴館とこのダンスホールではその意義からして違うのですが、今でも思

い出すとイメージが重なります。

この旅行中に、通訳の陳さんと団員の二、三人とで夜暫くの間でしたが話したことがあります。

問「今の中国で僧侶はどのような地位にあるのですか。」

答「中国民衆は大きく労働者と農民にわけられます。僧侶はその農民の地位にあります。ですから普段は田を耕し畑にも出ます。」

問「文化大革命によって仏像や仏教の施設が破壊されたと聞きますが、その他に変化がありますか。」

答「ある寺では文革以前に約千人いた僧侶が現在では五十名しかいません。」

問「僧侶は葬式にいったお経を唱えますか。」

答「以前は葬式にいきましたが、今はいきません。遺族が集まって弔うだけです。ただ年輩のおじいさんとかおばあさんが葬式に僧侶を呼ぶことがあるそうです。」

問「中国の若い人は仏像を拝みますか。」

答「今の青年たちは拝みません。仏教がどういうものかも知らない人が多いのです。」

これらの一問一答の中に、中国へ来て見聞したことで疑問な点に対する答を見つけることができました。その話の中では労働者と農民とのことについても、労働者と農民の賃金格差は存在し、農民は労働者の半分の所得しかないが、農民は賃金の他に生産物

中国旅行を振り返って（伊藤）

の現物支給がなされていて最低生活を保障されている、と話してくれました。解放前、農民は常に飢餓状態にあったことから比較すれば今日では生活が安定し、年々収入も増え労働者と農民の賃金格差は縮少しつつあるようです。

一週間の旅行中には数人の中国人と話すことができました。陳さんと共に随行した通訳の奚鳳仙さんは、杭州——国清寺——天童寺——杭州と四日間親切に世話をしてくれました。そして奚さんと同じ期間、我々や我々の荷物を運んでくれたマイクロバスの運転手姚叙水さん他二名。杭州から天台山へ行く途中休憩した嶼県の竹細工工場の孫さん。天台山で会った服務員の二人の女性。杭州飯店の切手売場の人なつこい女性。靈隠寺で「ハロー」と親しげに声をかけてきたのは福建省から来たチャン君で、南京の近くの馬鞍山へ行く途中とのことで、日本語は話せないと残念がっていました。以上の人たちと時にはかたことの日本語で、時には身ぶり手ぶりで、時にはノートに漢字を書いてお互いの意志が通じた時の喜びは一忘れれることができないでしょう。

今の中国の生活水準は、欧米・日本と比較すれば若干の差があると言えるでしょう。外国人専用紙幣、専用ホテル等が設けられているのもその現われであると思います。しかし、私は中国の人々を撮った写真を見る時、そこにみえる笑顔の中に生活の安定への満足と今を精一杯生きる姿を感じるのでした。